すぎなみサイエンスフェスタ１０年をふりかえって①

原田佐和子（はらださわこ）さん

すぎなみサイエンスフェスタ実行委員会委員長（第 10 回～）。科学読物研究会員。ＫＳＣＣサイエンスくらぶ講師。

―まずサイエンスフェスタとの最初のかかわりを教えてください。

○30 年くらい前、科学読物研究会という団体に入り、その会の先輩と一緒に中央図書館で小学生向けの科学あそび講座の講師をしていました。そのころお世話になった方から「今度サイエンスフェスタという科学イベントをやるから出展しませんか？」と声をかけられ「面白そう！」と参加することにしました。

―第 1 回目の出展ブースはどんな感じでしたか？

○とにかくいろんなジャンルの科学が体験できるようなお祭りにしたかったので、知り合いの区内の科学団体に声をかけて、またその知り合いに声をかけてもらって…と。杉並区にはたくさんの科学団体やサークルがあったんですけど、当時は横のつながりがほとんどなくて、サイエンスフェスタがきっかけでそういう人たちが 1 か所に集まることができたのが嬉しかったですね。

―実際の第 1 回目の雰囲気はどうでしたか？

○当日は想定していたよりはるかに多くの人が来場されて、自分のブースの対応だけでもう精いっぱい。他のブースや会場を見て回る余裕がなかったですね。

―嬉しい誤算だったんですね。

○はい。それでも手ごたえがあったし、他の出展者の皆さんとつながりができて、仲間が広がったこともあって来年第 2 回を開催しよう！とすぐに思いました。

―10 年間のサイエンスフェスタで印象的だったことは。

○やっぱりコロナですね。結局 3 年間開催中止になりましたけど、とにかくみんなでやれることをやり続けた。あれがなかったらコロナ明けには継続できなかったかもしれない。パンフ、動画、内覧会など、どんな形であれやり続けたことが今につながったと思います。

―コロナによる中断もありましたが、とにかく 10 年やり続けました。

○毎回新しいことを取り入れて、挑戦して、試行錯誤をくり返して…。でもそれが楽しいです。新しい仲間とどんどんアイデアを出しあってブラッシュアップしています。

―実行委員会にはさまざまな科学の分野、新しい方がどんどん参加されていますね。

○サイエンスフェスタ実行委員会が掲げる目的の一つに「杉並区内の科学のネットワーク作り」があります。これができてきていると思いますね。

―サイエンスフェスタが始まって 10 年が経ちました。これからの 10 年はどうあってほしい、どうしていきたいと思いますか。

○若い方―中学生・高校生にもっと参加してほしいですね。それも出展者、教える側として。やっぱり中高生のお兄さん・お姉さんの方が参加者のお子さんたちの「食いつき」が違うんですよ(笑)。そしてサイエンスフェスタに参加した子どもたちが大きくなって教える側に回って、また次の世代の子どもたちに教える…そんなことができれば理想的ですね。

―サイエンスフェスタは大人の方も楽しめる内容を提供したいと考えていますね。

○参加者はお子さんが多いですが、サイエンスは大人もやれば絶対に楽しいし面白いんですよ。付き添いで後ろで見ているだけでなく、遠慮しないでどんどん参加して質問してください。そこで知った科学知識を帰ってから家族で話し合うのも楽しいですよ。

―これからサイエンスフェスタにかかわるみなさんへのメッセージを。

○私は常に遊ぶことが好きなんです。サイエンスフェスタのこの 10 年もとても楽しく遊びました。面白そうなこと、サイエンスフェスタのテーマでもある「？を見つける」ことをしてみて、その面白いことや「？」をつきつめていくと、楽しさはさらに広がりますよ。

―ありがとうございました。

すぎなみサイエンスフェスタ１０年をふりかえって②

檜枝光太郎（ひえだこうたろう）さん

すぎなみサイエンスフェスタ実行委員会副委員長（第８回～）。立教大学名誉教授。ＯｇｉＬＯＶＥ代表。

―檜枝さんは第 1 回から参加されていますね。

○大学を退職して時間ができたから地域で子どもたちへの科学教室でもできればいいなと思っていましたが、なんせ始め方がわからない。そんな時に「すぎなみ大人塾」（社会教育センター主催講座）で現実行委員長の原田さんと出会いました。すると今度サイエンスフェスタというイベントが開催されると。そこでお手伝いする形で参加しました。

―講師をされたのですか。

○いえ、まったくの雑用、お手伝い。ワークショップは「ダチョウのたまごでストラップ」という内容でしたね。とにかくすごい人出で用意していた材料が底をついて、私はひたすら追加のストラップの穴を開けていました(笑)。

―第 1 回の雰囲気はどうでしたか。

○こんなにも熱気があるイベントになるのかと驚きました。だから今でも第 1 回のあのにぎわいが私のサイエンスフェスタの原点なんですよ。

―サイエンスフェスタで特に印象的だったことは。

○小中学生のサイエンスグランプリ（科学の自由研究作品展）受賞者の発表会です。準備段階での打ち合わせではみなさん慣れていないこともあって緊張されていますが、いざ本番となると、自分の研究を自分の言葉でのびのび発表されて、本当にすばらしい。今後も続けたいしですし、多くの方に見ていただきたいですね。

―子どもたちの研究はいかがですか。

○自分の好きなもの、興味のあることをどんどん調べていく。本で調べたり専門家の先生に聞きに行ったり。そしてそれを自分でもアイデアを出して実験していく。ひとりひとり自分の世界を持っている。これがすばらしいですね。

―これまでの 10 年間をサイエンスフェスタはいかがだったでしょうか。

○会場がセシオン杉並から始まり、コロナでの中断を挟み、高円寺学園、そして IMAGINUS（イマジナス）と変遷した中でさまざまな経験を積みました。それぞれの会場での特色を活かしたいろんなアイデアや工夫がどんどん出てきて、新しい企画も生まれました。進化し続けた 10 年だったと思います。

―第９回からは IMAGINUS が会場となりました。

○IMAGINUS での開催によってサイエンスフェスタがしっかりと定着し、より充実化してきたと感じます。今後も「IMAGINUS ならでは」というイベントにしていきたいですね。

―サイエンスフェスタのこれからの 10 年をどうしていきたいですか。

○どうしても子ども向けの内容が多くなってきているので、大人向け、全世代向けの講座や企画を広げていきたいですね。親世代や地域の大人をまきこんでどんどん企画者側・出展者側として参加してもらうような。

―大人も含めた全世代が科学に触れ、楽しめる場としてのサイエンスフェスタということですね。

○はい。それはもちろん子どもたちもです。「子ども実行委員会」や「中高生実行委員会」みたいな集まりを作って、サイエンスフェスタをベースとした杉並区全体のゆるやかな科学の部活動のようになれば・・と夢想しています(笑)。

―最後にサイエンスフェスタにかかわるみなさんへのメッセージを。

○子どもたちが自主的に活動できる環境が重要だと考えています。自分の疑問・関心に対して、自分の頭で考え、自分の体を動かし、自分で答えを見つけることこそが学びだと思います。最近よく「コスパ」「タイパ」という言葉を聞きます。でも私は効率を優先して答えを早く出すことよりも、たとえ時間がかかっても自分で納得できる答えを見つける、その過程こそが大切だと思います。サイエンスフェスタではそのような深い体験ができる場であり続けたいと願っています。

―ありがとうございました。

すぎなみサイエンスフェスタ１０年をふりかえって③

浅井義彦（あさいよしひこ）さん

元すぎなみサイエンスフェスタ実行委員会委員長（第１回～第９回）。日本スペースガード協会員。元宇宙科学研究所（現JAXA）共同研究員。

―浅井さんは第 1 回から実行委員長としてかかわってこられました。

○もともと高円寺の地域活動の一環として、セシオン杉並で科学講座やワークショップを何度か開いていたんですよ。そこに今度サイエンスフェスタという科学のお祭りを開催すると。研究員時代から科学教育、宇宙教育が大事だと思っていたので、地域でもやってみたいなとずっと考えていました。科学畑の人間だったこともあり、そのご縁で実行委員長になりました。

―実行委員長としてどんなイベントにしようと思っていましたか？

○区民向けの科学教育の場としてのお祭りでもありつつ、それを提供する側、つまり出展者側が科学の大切さを知り、それをどう連携し、どう共有するか、そしてそのつながりの仕組みとネットワークを作ろうと考えました。

―それはできていましたか。

○もちろん最初は区内の科学団体が集まるところからですが、２回、３回と回を重ねるにつれ、徐々にできていったと思います。

―この 10 年間で印象的だったことはなんでしょうか。

○コロナによって中止を余儀なくされましたが、これで終わることがないよう、いかにつなげていくかを実行員会みんなで考えたことですね。「コロナだからダメだ」ではなく「コロナだからこそできることをやってみよう」と。科学的見地に立ち、サイエンスとしての基盤を見失うことがないように心がけました。それはサイエンスフェスタの共有財産として再構築できたと思います。

―最初に考えたネットワークですね。

○はい。大げさにいうと、コロナという世界的な危機の中で、サイエンスというつながりによって信頼できる関係性とネットワークを築き、共有することができたと考えます。

―10 年間続けてきたことをどう思いますか。

○実行委員やスタッフが自信をもって科学教育を進めていることができてきたと思います。多様な科学分野の委員がお互いを尊重しながら、やりたいことをやりたいペースでできる、相互的に進める姿が生まれました。そんな多種多様な科学団体が一堂に会するサイエンスフェスタという場ができ、多くの区民の皆さんがサイエンスに触れる。これは自分で言うのもなんですが、すごいことですよ(笑)

―変わること、変わらないこともあったと思います。

○もちろん様々あります。が、それを共有しながら科学のネットワークを強くしていった。これこそが 10 年続けたことの意義でしょうね。

―これからの 10 年、今後のサイエンスフェスタはどう進化していくでしょう。

○サイエンスフェスタでは主に小中学生向けの科学教育、つまり理科の分野を扱ってきました。子どもたちがこれからの世界の未来を創っていく以上、それだけでは足りません。人文系や社会科学分野の境界領域も見据える必要があると思います。

―第 9 回・第 10 回サイエンスフェスタの中で実施した「ゆるっと研究者トーク」ですね。

○そうです。その時はそれぞれ哲学研究者と文化人類学研究者とのサイエンストークイベントとして開催しました。こういった企画を今後はどんどんやっていきたいですね。

―浅井さんはサイエンスフェスタを地域全体に広げたいとおっしゃっていました。

○サイエンスフェスタが IMAGINUS を中心として、町会や商店街、街から地域全体にそのネットワークを広げたいという夢があります。街全体がサイエンスのイベント会場となって、展示したりワークショップしたり実験したり…。そんなサイエンスフェスタを目指したいですね。

―ありがとうございました。